子どもの発達支援を考える5Tの会．会報四号 2019

講演 2

自閉症スペクトラムのある子へのコミュニケーション支援

◇門 眞一郎　フリーランス児童精神科医

1. はじめに

フリーランス児童精神科医の門眞一郎です。「フリーランス」というと聞こえがいいのですが、要は、年金生活者の門です。よろしくお願いします。

私が、残りの人生でやりたいことの1つが、できるだけPECSを普及させたいということです。ですから、今日はこういう機会を頂いたので、皆さんにPECSについて、現在はどんな形でやっているのかということをできる限り、ご紹介したいと思います。

2. 障害のある人の権利に関する条約（国連）

まず、かたい話から入ります。国連の「障害のある人の権利に関する条約」通称、障害者権利条約というものがあります。国連総会で採択されてから、日本国政府は、これをなかなか批准できなかったのです。それは、この条約を批准するためには、国内法の整備をしないといけなかったからです。国内法より上にこれが来るので、その準備にいろいろ時間がかかったということです。現在は、この条約は批准されており、そのために障害者差別解消法という法律ができたり、障害者基本法が改正されたりしました。

この条約の第21条に、コミュニケーションに関する条文「**表現および意見の自由、並びに情報の利用の機会**」という項目があります。その一部を、ここに挙げました。

「締約国は、障害者が第2条に定めるあらゆる形態のコミュニケーションであって自ら選択するものにより、表現及び意見の自由（他の者との平等を基礎として情報及び考えを求め、受け、及び伝える自由を含む）についての権利を行使することができることを確保するための全ての適当な措置をとる」

1回読むだけでは、全然わからないと思いますが、第2条に、いろいろな用語の定義がしてあり、その中でコミュニケーションの定義もしてあります。要は、皆さんにはもう釈迦に説法だと思いますが、コミュニケーションは言葉だけではない、いろいろな手段があり、「補助代替コミュニケーション」という言葉で、ほぼ総括されます。そういったいろいろな手段で、次が非常に大切なのですが、「**自ら選択するものにより**」つまり、コミュニケーション手段を選ぶ権利は、障害を持っている本人にあるということです。

今日は、「自閉症スペクトラムのある子へのコミュニケーション支援」という表題ですので、自閉症スペクトラムを想定していますが、自閉症スペクトラムの人は、言葉でコミュニケーションを取るということが非常に難しいです。ですから、他の手段の方がコミュニケーションを取りやすいのです。そういう他の手段を私は使いたいし、使ってほしいという、手段を選ぶ権利は本人にあるのです。

しかし、「世の中に出たら、絵カードとか、いろんな視覚的な支援はないし、してもらえないんだから、言葉でコミュニケーションを取れるようにならなきゃ駄目だ」と、学校で言われたという話をよく聞きます。手段を教師が選択してしまうのです。それは、権利を侵害していることになるのです。

そして、第21条の（a）～（e）の中の（b）には、「障害のある人が、その公的な活動において、手話、点字、補助代替コミュニケーションやその他のすべての利用可能なコミュニケーションの手段・形態・様式を、（ここですね）自ら選択して用いることを受け入れ、促進する。」と記されています。法律で定められているのです。

3. 自閉スペクトラムと自閉スペクトラム障害

ここで自閉スペクトラム障害の話をします。たぶん、皆さんはご存知でしょうが、最近は、「自閉症スペクトラム」ではなくて、「自閉スペクトラム症」という言い方が広まって、ほとんどの人がそれを使うようになりました。あれは、アメリカの精神医学会がつくっている診断分類と診断基準を日本語に翻訳するときに、「自閉スペクトラム症」という日本語名にしようということになったわけです。しかし、別に強制性があるわけではなく、そういう提案がさ

れて、みんながワッと受け入れてしまったということなのです。

今日は、時間がないので詳しくは言いませんが、私は、「自閉スペクトラム」と「自閉スペクトラム障害」という2つの言い方をします。どう違うかと言いますと、「障害」という言葉がつくかつかないかということです（ここが大切です）。

「自閉スペクトラム」という状態は、生まれつき脳機能のタイプが一般の人とは違うということなのです。多くの本は、ここでいきなり、「生まれつき、脳に機能障害があって」というふうに始まりますが、私は、障害はやはり社会モデルで考えます。だから、「本人の中に障害があって、その本人の中の障害をなんとかしましょう」（医学モデル）ということではなく、本人の中にあるのは「脳の機能変異」です。それが、環境や社会との関係の中で「障害」という状態になるということです（社会モデル）。

脳機能のタイプが違うということだけでしたら、別に「障害」とは言えません。例えば、皆さんがよくご存知の脳機能のタイプの違いには、利き手の違いがあります。左利きと右利き。しかし、左利きの人に「利き手障害」というふうには言わないでしょう。けれども、左利きの人が、とても使えないような機械や道具を使わなければいけない職場に配属されたらどうなるでしょう。仕事にならない。叱られ通しで、うつ状態になってしまうかもしれない。あるいは、首を切られてしまうなどという状態になるかもしれない。そうなると、左利きのその人は、その職場環境では「利き手障害」になってしまうのです。「障害」というのは、要するに日常生活や社会生活に大きな制約を受けている状態です。したがって、その職場環境ではそうなってしまうということなのです。しかし、配置転換されて利き手が関係ないところで働けるようになったら、全く普通に仕事ができる。そうなった時には、もう「利き手障害」ではなくて、単に「左利き」と言うだけなのです。

それと同じような考えで、「自閉スペクトラム」というのは、生まれつき脳機能のタイプが他の人とは違う、独特な脳の情報処理の仕方、ものごとの感じ方、理解の仕方が一般の人とは違うというだけです。劣っているとか、障害をもっているとかということではなく、発達に著しくメリハリがきいているというふうに私は呼んでいます。

よく言われるのは、「発達に凸凹がある」という言い方です。しかし、「凸凹」からは、私はあまりいいイメージを受けないので、「メリハリ」と言っています。だから、一般の人というのはメリハリのない、のんべんだらりとした発達をしている人。自閉スペクトラムの人というのは、非常にメリハリがきいている。きき過ぎて、障害レベルになってしまうような事態を招くことがあるのですけれども、要は、ここまででしたら「自閉スペクトラム」ということです。

しかし、環境との関係の中で、「自閉スペクトラム」の人を取り巻く人たちの理解や支援がうまくいっていないと、先ほどの職場のような例ですが、その人の日常生活や社会生活に大きな支障をきたすようになります。そうなったときに、それは「障害」の状態ということになります。だから、そういう状態になっている人に私は、「自閉スペクトラム障害」と診断名をつけるわけです。ですから、こういう障害レベルにならないように周囲の人が理解や支援をすればいいということになります。つまり、すごくメリハリはきいているけれども、そのことで、周りから理解され、必要なサポートが得られて、日常生活や社会生活に大きな支障をきたすことがなければOKということです。よって、周りの人がどういうふうに理解し、支えていくかです。それには、その人のメリハリをよく理解する必要があります。

4. 自閉スペクトラムの人の最も重要なメリハリ

自閉スペクトラムの人は、メリハリが、すごくきいてしまっています。要するに、できることとできないことの落差が、非常に大きいのです。発達障害の代表選手は知的障害ですけれども、知的障害の人との大きな違いは、この点です。

今日は、どんなメリハリがあるかという話をする時間はないので、一つだけ、最も重要なメリハリだけをご紹介します。それは音声言語だけでは理解しにくい、言葉だけで伝えられてもその意味を正確に理解するのは困難だということです。もちろん、簡単な言葉でしたら、そんなに問題はないかもしれませんが、長々だらだら、くどくどとしゃべられたりすると、意味処理が追いつかなくなるのです。途中までしか追えなくなって、途中までしか理解できなかったりするのです。

日本語は、厄介です。否定文というのは、最後まで聞かないとわからないのです。ですから、途中で意味処理が追いつかなくなり、実はそれが否定文で

最後にひっくり返されるというのがありますが、彼らはそこまでたどり着けないので、肯定文のように取ってしまう可能性があるわけです。例えば、「これこれ、こういうことをしてはいけませんよ」という事を、「これこれ、こういうことをしなさいよ」というふうに理解してしまう。だから、「『やったらいけない』って言ってんのに、なんでそれをわざわざやるの！」ということになったりするわけです。とにかく、いわゆる言葉を聞くだけでは意味を正確に理解しにくい。しかし、視覚的な手がかりがあれば理解しやすいという、この落差と言いますか、このメリハリが支援する時に最も重要なポイントになるのです。

5. 誰だって視覚優位

自閉スペクトラムの子どもは相対的に視覚優位なのです。けれども、皆さんも、もう経験されていることだと思うのですが、彼らの中には、「いや、この子は、視覚優位じゃない。聴覚優位です」というふうな心理判定の結果が返ってきたりすることがありますよね。あれは、大うそです。目が見えているなら、もう視覚優位に決まっているのです。

知能テストや発達テストの問題というのは、非常に特殊な問題です。年齢順に並べられるような問題しか使えないのです。「みそ汁は、何歳になったら作れるか」というようなことは、問題として使えないのです。しかも、密室で検査するわけでしょう。1対1で、一方的に言葉で質問される。視覚的な手がかりのある問題もあるけれども、基本的に、一方的に質問されて答えなければいけないのです。それは、特殊な環境で、特殊な問題で検査するわけですから、その人の日常生活のコミュニケーション能力全体をみるということは、その検査だけではなかなか難しいのです。みんな、視覚優位なのです。

図1は、日本眼科啓発会議というところがつくっているポスターの上半分ですが、下半分（図2）にはこういうふうに書いてあります。「情報の約80％は、目から入ります。」

図2の吹き出しは私がつけたもので、もとのポスターにはありません。日本眼科啓発会議は、自閉症の人のことを言っているのではなくて、一般の人に関して言っているわけです。みんな、視覚優位なのです。

だから、学校の先生がどんなに否定しようと、世の中、一般の人に対して、視覚的な支援だらけです。

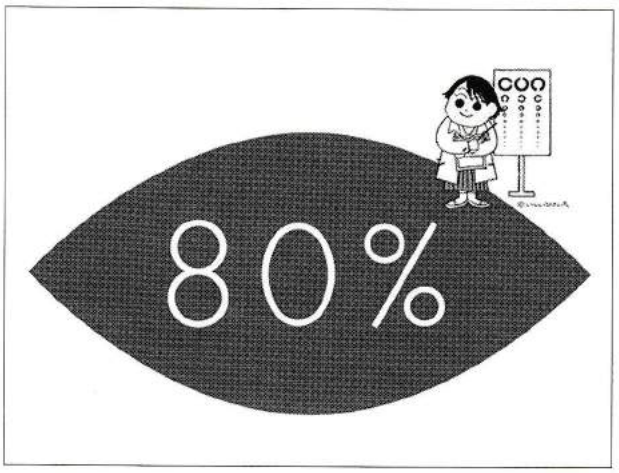

図1　日本眼科啓発会議のポスター（上半分）

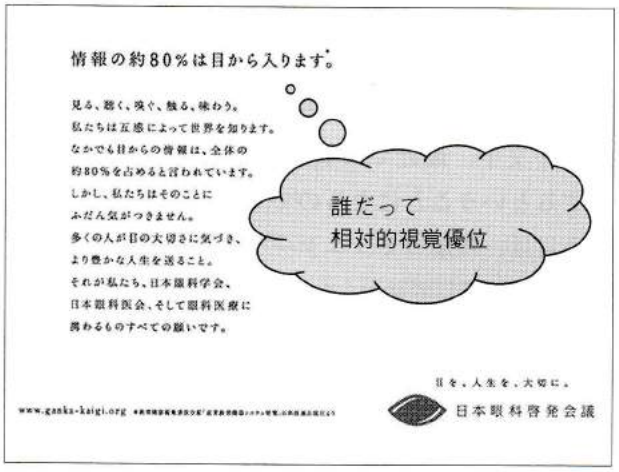

図2　日本眼科啓発会議のポスター（下半分）

駅に行ったら、よくわかります。いろいろな表示があって、視覚的に見たらわかるように、混乱しないように、情報がきちんと伝わるようにしてあるし、そういうのが年々どんどん増えています。学校が、特殊な環境になりつつあるのです。

つまり、誰だって相対的に視覚優位で、一般の人が80％だとすれば、自閉スペクトラムの人はもっとです。90％、中には99％視覚から情報を取っているとしか思えないような人もいます。言ったことは、一切伝わらないけれども、何か手がかりを見せれば、ぱっと理解できるというように。だから、このメリハリ、相対的に視覚優位ということを、コミュニケーションに関して支援する時に忘れてはいけないのです。

6. ASDの人へのコミュニケーション支援
――ハリを活かすなら視覚的支援

自閉スペクトラム、自閉スペクトラム障害の人へのコミュニケーション支援をするときに、今、言ったメリハリのハリを活かして支援するとしたら、コ

ミュニケーションに関しては視覚的な支援です。コミュニケーションですから、表出と理解と両方の方向があります。こちらから伝えて理解してもらう、本人からこちらに伝えてもらう。この両方をきちんと支援しないとコミュニケーションの支援をしたことにはなりません。

どちらに関しても、視覚的な支援ということは、補助代替コミュニケーションを使うということですけれども、補助代替コミュニケーションの中でも、絵、写真、文字などというのは消さない限りは非一過性です。そこに存在し続けるものです。補助代替コミュニケーションの中でも、手話は動作だから一過性です。すぐに消える一過性のものよりも存在し続ける非一過性のものの方が、やはり理解しやすいです。ということは、表出も理解もどちらも、絵や写真や文字、最近ではICT機器などを使って、支援するということになるのです。

今日は、理解コミュニケーションの方は省略します。これに関しては、いろいろな人が既に書いたり、話したりしていますから、特に今日の講演では触れません。一番大事なのは、構造化ということなのですけれども、構造化というのは、理解コミュニケーションの支援であるということだけは、今日は覚えて帰ってください。構造化だけを取り出すから、わかりにくいのですけれども、これは実は理解コミュニケーションの支援なのです。そしたら、表出コミュニケーションの支援もきちんとしなければいけません。それを、どうするかということです。絵、写真、文字、ICT機器など、こういうものを使って伝えてもらうわけですけれども、それらを目の前に置いたら、それを使ってどんどん伝えてくるかといえば、そうはいかないのです。やはり、使い方を教えないといけません。こういう手段を使って、自分の意思を伝えてくださいということを教えないといけないのです。けれども、PECSという方法が登場するまでは、教える時には、まずこちらから働きかけて教えるので、応答のコミュニケーションの練習ばかりになってしまっていたのです。今までは、自発的に表出するということを教えることができなかったのです。PECSで、初めてそれが最初からできるようになったのです。今日は、そのPECSの話を残りの時間でしようと思います。

7. 米国小児科学会（2012）・米国児童青年精神医学会（2014）

まず、紹介したいのは、アメリカの小児科学会が、2012年に出した、**ASDの子どもへの非医療的な支援**というガイドラインです。その中に、下記のように書いてあります。

> ・音声言語に制約がある、あるいはコミュニケーションの改善を目的とする、複数の支援法に反応しないASDの子どもには、PECS™を使う機会を提供すべきである。
> ・PECS™がうまくいかない、あるいはコンピューターなどの機器の柔軟性が利点として期待できそうなら、そのような機器による補助・代替コミュニケーションによる支援を検討すべきである。支援者は、機器の効果的な使い方を教えなければならない。

PECSは、この右肩に™と付いているように登録商標ですから、言わば商品名なのです。商品名なのに、学会のガイドラインに登場しているのは非常に珍しいと思います。これは、2012年に出された文章です。

2年後の2014年には、同じくアメリカの児童青年精神医学会が、以下のガイドラインを出しました。

> ・コミュニケーションは、支援の重要な焦点であり、通常は言語聴覚士と協働して子どもの個別教育計画の中で取り組む。
> ・言葉をまだ話せない子どもには、サイン言語や、コミュニケーション・ボード、視覚的支援、絵カード交換などの代替コミュニケーション手段や、その他の補助コミュニケーション手段を使って支援ができる。PECS™やサイン言語、活動スケジュール、音声出力装置（VOCA）の有効性を示すエビデンスがある。

ここにもPECSが出てきます。こういう時代になってくると、PECSは、急激に世界中で広まってきますし、ここ数年、PECSに関する研究論文の数がどんどん増えてきています。

8. PECSとは

ここから、そのPECSとはどういうものかとい

うことを、ほんのエッセンスになりますがお話しします。PECSは"The Picture Exchange Communication System"の頭文字を取ってPECS。日本語名は「絵カード交換式コミュニケーション・システム」。実はこれは、私がそういうふうに提案して正式に採用された名称です。これはそのまま訳しただけですから、なんの自慢にもならないのですが、少し、こだわっているのがここに中黒を入れたということぐらいです。しかし、これを変な日本語名にして、本に書いている人もいるのです。交換式というものをとばして、「絵カードコミュニケーションシステム」。それは間違いですし、他にも非常に有名な児童精神科医ですが、PECSを「PEC」というふうにSを抜かして書いている人もいます。あくまで、「PECS」です。開発者は、応用行動分析のアンディ・ボンディさんと、日本でいう言語聴覚士、向こうでいうSLP = Speech Language Pathologistのロリ・フロストさんです。

その理論的な基盤は、ピラミッド・アプローチという応用行動分析なのですけれども、その入門書も日本語版が出ました。これはPECSだけではなくて、いろいろなことを子どもあるいは大人に教えるときや、新しいスキルを習得してもらうために教えるときに知っておくと役に立つというか、知っておくと無駄な失敗をしないで済むという本です。一応、監訳者は私なのですけれども、ボランティアでやったため、一切お金が入って来ません。皆様が何冊買ってくださっても私の年金生活には、何の足しにもならないのですが、お勧めします。いい本です。最近まで、直接注文しないと買えなかったのですけれど、今、アマゾンでも買えるようになりました。しかし、アマゾンで検索すると古い版が出てくることがありますので、気を付けてください。この黄色い表紙の、新しい版です。

9. PECSの対象

では、PECSの話に戻ります。PECSの対象になる人、どういう人にPECSを使うかと言いますと、まず、年齢、障害は問わないです。年齢は関係ないですし、障害も自閉症でないと駄目ということはないのです。私なりにまとめた以下の3つの条件のどれか1つでも当てはまれば、PECSを使ってみる価値があります。

1つ目は、これが第一候補ですが、**音声言語でコミュニケーションを取れない人**、言葉でコミュニケーションが取れない人あるいは、ほとんど取れない人。

2つ目は、**自発的なコミュニケーションが難しい人**。つまり、音声言語でコミュニケーションを取るスキルはもっているけれども、それが自発的に使えない。聞かれたときだけ答える。だから、聞かれないと答えられない。どれだけ困っていても伝えられないという人がいます。特に、自閉症で知的障害が重いとそうです。

3つ目は、**自発的に言葉でコミュニケーションを取れるのに対人接近ができない人**。例えば、作業をしていて材料が足りなくなってしまった時に「～が足らない」「～をください」など、その場で自発的に言葉で言っているのですけれども、スタッフはずっと向こうにいたり、あるいは別室にいたりして全く聞こえない。ですから、そこまで行かないといけないが、行けない人、その場から動けない人がいる。そういう人には、PECSが役に立ちます。この3つのうちのどれか1つでも当てはまればPECSを使ってみたらいいと思います。

10. コミュニケーションのはたらき

PECSで教える表出コミュニケーション機能は要求とコメント、この2つにまとめています。要求というコミュニケーション機能は、要求したら、要求したことが大抵叶えられる。だから、子どもはその機能を身に付けていくのです。特に年齢が低い子は、叶えられることのほうが多い。要求したら要求は叶うということで、また要求したくなったときには要求しようというふうになるわけです。

コメントは、どうでしょうか。コメントは、例えば、遠くにヘリコプターが飛んでいるのを見つけて「あ、あそこにヘリコプターが飛んでいる」という場合です。

さて、それでどうなるか。ヘリコプターに乗せてもらえるわけではないです。ヘリコプターのおもちゃをもらえるわけでもないです。何が手に入るかというと、まず同意。「あ、本当だね」という同意が返ってくる。さらには「あんな小さいものがよく見えたね。いい目をしているね」などとほめてもらえます。同意や賞賛などが返って来て、それが嬉しいから、またコメントしようという気になってくるのです。

11. これまでの教え方の欠点

ところが、自閉スペクトラムの人は同意や賞賛というものがあまりピンときません。特に年齢が低かったり、知的障害が重かったりすると、同意や賞賛というものは普通は言葉ですから、それを理解するのがメリの自閉スペクトラムの人には、なおさら伝わらないのです。ですから、同時に教えられないので、どちらかから先に教えていくとすれば、要求から手をつけた方がいいでしょう。

ところが、これまでの教え方、コミュニケーション、言葉の教え方は、ST の人を前にしてこういうことを言うのは初めてなので、緊張しますが、要求ではなくて、コメントから教えていこうとするでしょう。それから、応答です。まず、こちらが働きかけるから、「これは、なんですか。コップですよ。コップと言ってごらん」など、実際にはどういうことをされているのか、私にはよくわからないですけれども、とにかく、まずこちらから働きかけをしてしまうので応答になってしまう。

自閉スペクトラムの人に、応答のコミュニケーションの練習ばかりさせていると、プロンプト依存になりかねない、指示待ち状態。ところが指示待ちを誤解する人がいます。指示を待って行動する、いい生徒だと。勝手なことをしない、指示が出るまで待てる。だけど、そういう指示待ち状態は「自立」とは正反対の状態ですから、将来できるだけ自立した生活を送れるようにサポートしようとしたら、できるだけ、このプロンプト依存の状態にはしないように気を付けないといけないのです。したがって、やはり教えるなら自発的な要求から教える方が理にかなっていると思いませんか。

12. PECS の 6 フェイズ

0：準備：強化子(好子)アセスメント，絵カード作成
1：絵カードで自発的に要求する.
2：離れた位置から絵カードを自発的に交換しにきて 要求する(自発的な対人接近).
3：要求に使う絵カードを弁別し自発的に選択する.
4：「○○ください」という文で自発的に要求する.
5：「何がほしい？」と聞かれて応答的に要求する.
6：質問に応答的にコメントする.
自発的にコメントする.

図3 PECS の 6 フェイズ

PECS は、最初から自発的な要求を教えるのです。PECS の中心的なトレーニングは、**図3**の6つのフェイズで、手順はマニュアル化されています。これで、自発的な要求とコメントを教えるのです。

実は、これだけではありません。PECS は当然、理解コミュニケーションも教えますので、理解コミュニケーションのトレーニングも行います。しかし、なんと言っても特徴的なのは、自発的な要求を最初に教えるということです。

まず、**フェイズ１**では、**絵カードで自発的に要求する**ことを教えます。自分から絵カードを渡して、自分が要求したいものを受け取る。これは、目の前の人に渡して要求するものです。

これが、自分１人の力でできるようになったら、**フェイズ２**にいって、**離れた位置から絵カードを自発的に交換しに行って要求する**という、**自発的な対人接近**を教えます。つまり、絵カードを受け取る人が少しずつ離れていき、そこまで歩いて絵カードを渡しにいかなければいけないということです。それから、もう１つは絵カードが置いてある場所を少しずつ離していくというものです。これは、自発的な対人接近で非常に大事なフェイズなのです。

なぜ、最初からこの**「自発的」**ということを教えられるようになったかと言いますと、このフェイズ1と2だけは、2人がかりで教えるからです。従来は、教える人は１人で子どもが１人、教える人１人で子どもが複数などという設定でしょう。PECS のフェイズ1、2は、2人がかりで子ども１人を教えるのです。だから、**「自発的」**ということを教えられるのです。これについては、あとで具体的にご説明します。

そして、**フェイズ３**にいき、**要求に使われるカードを弁別し自発的に選択する**ことを教えます。最初は２枚のカードから、自分が要求したい物のカードをきちんと区別し、それを選びます。選んで渡すということを教えるのです。それが３枚、４枚、５枚というふうに、少しずつ数が増えていく中で、きちんと弁別して選択できるようにします。

このフェイズ３で、絵カードの弁別を教えるということは、実はそれまでのフェイズ1、2では絵カードの弁別ができていなくてもいいということなのです。だから、この絵カードが何を表しているのかということがわからなくても、フェイズ1と2のトレーニングはできるということです。よって、年齢が低いうちからでも、また障害が重くても早くから取り組めるのです。絵カードの区別はフェイズ３で教えます。

そして、何枚か絵カードの区別ができるように

なったら**フェイズ４**にいって、**文で自発的に要求する**ことを教えます。最初は、「○○」＋「ください」と、２枚のカードで要求してもらう。それができるようになったら、３枚のカードで「○○さん、～をください」、「大きい～をください」などというふうに、だんだん文を長くしていくのです。文で要求することをここで教えます。

そして、**フェイズ５**で初めて**応答的に要求する**ことを教えるのです。「何がほしいの」という質問をして、答えてもらいます。自発的な要求のほうが難しいので、それをしっかり４までで身に付けていれば、これは簡単です。

フェイズ５で応答を教えて、**フェイズ６**で意欲をなかなか続けさせにくい**コメント**を教えます。**まず応答から入っていき、そして自発的なコメント**につないでいきます。

13. 準備：強化子（好子）アセスメント

PECSのトレーニングは、基本的には、応用行動分析に基づいています。まず要求したくなるものを用意しないといけません。それが、**強化子**です。しかし強化子は、要求したいものという意味ではないのです。応用行動分析で、強化子というのは、ある行動の直後に何かが出てきたら、その行動がまた繰り返されるようになる場合、そういう行動の直後に出現したものが、強化子なのです。

例えば、「お手伝い」という行動の直後に「ほめられる」ということが返って来て、また「お手伝い」をするようになったとすれば、「ほめられる」ということが強化子になり「お手伝い」という行動が強化されたということになります。「ほめられる」ことでは、強化されない子は「お小遣い」をもらえると「お手伝い」を積極的にやってくれるようになったということであれば、「お小遣い」が強化子になります。

理論的にはそういう定義なのですけれども、現実には、やはり好きなものや欲しがるものが多いわけです。ですから、そういうものを見つける。つまり、その子にとって強化子となるものを探していくことが、強化子アセスメントなのです。そのためには、その子の普段の生活をよく知っている人から情報を得ます。どういう事が好きなのか、食べ物、飲み物、おもちゃ、活動などそういうものを聞き出します。

また、今、好きなものがずっと一生続くわけではないので、新しいものをいろいろ試していき、強化子になるものを探していくということが大切になってきます。ですから、強化子アセスメントというものは、１回やったらおしまいではなくて、何度も更新していく必要があるのです。

14. フェイズ１：自発的交換を教える

フェイズ１はどういうものかと言いますと、その子の強化子がリストアップされて、その強化子をどれか1つ使って、「では、フェイズ1に取り組みましょう」と、２人がかりで教えると言いました。

図４のように、子どもと相対してコミュニケーションの練習をします。相手が、コミュニケーションパートナーという役目の人。そして、子どもの後ろにいる人がプロンプターという役目の人です。プロンプターは、身体的プロンプトだけをします。手を添えるというプロンプトだけをします。プロンプトは、いろいろな種類のプロンプトがあり、言葉、身振り、モデルなどいろいろありますが、PECSではたいてい身体的プロンプトだけを使います。

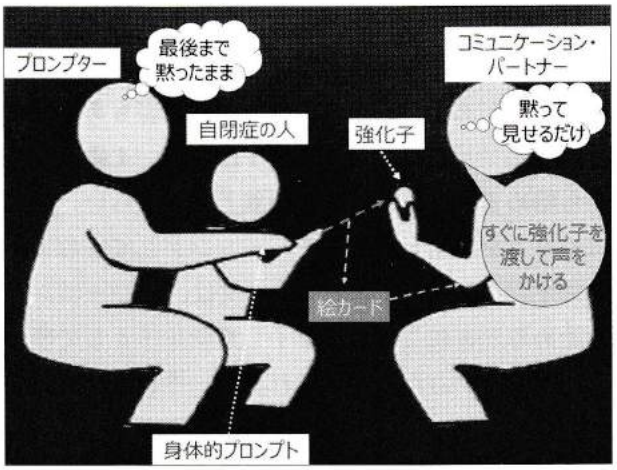

図４　フェイズ１の体勢

コミュニケーションパートナーは、強化子をさりげなく見せます。ここでは、口をきかない。黙っているのです。ここで、声をかけて名前を呼んだり「こんなのあるよ」というふうに言ったりすると、その後のやりとりは、応答になってしまいます。自発を引き出そうと思ったら、黙ってただ見せるだけです。子どもは、それが強化子であれば手を伸ばして取ろうとします。「手を伸ばす」ということが、自発的な行動です。けれども、これは、まだコミュニケーション行動ではないので、それをうまくコミュニケーション行動に変えてやればいいわけです。それをするのが、プロンプターなのです。

つまり、子どもが少しでも自分から手を伸ばし始

めたら、すかさず、その手を取り、目の前に置いてある絵カードを取らせ、その絵カードをコミュニケーションパートナーに手渡すということを身体的プロンプトだけで教えます。コミュニケーションパートナーは受け取ったらすぐに、強化子を渡して言葉をかけます。

これを繰り返すのですが、いつまでもダラダラと同じように繰り返すのではなくて、できるだけ早くプロンプトはやめていかないといけません。自立のためには、プロンプトはやめないといけない。だから、少し手前でプロンプトをやめます。最後の10cm手前ぐらいで、手を離す。すると、子どもは、そのまま絵カードを渡します。そうしたら、次は20cm手前ぐらいで手を離すというふうに、少しずつ最後からプロンプトを引き上げていくのです。最終的には、プロンプトを全くしなくても、絵カードを取って渡すようになります。それが、**フェイズ1**です。**自発的に、自分の力で絵カードを渡す**ということです。プロンプターは、最後まで黒子ですから黙ったままです。

【Video1】ここから、動画をお見せします。Tくんという、重複障害のお子さんです。先天性疾患に脳性まひがあり、自閉スペクトラム障害もあり、最重度の知的障害があります。PECSは、4歳4ヵ月から始めました。月1回、両親と来てもらい、両親にやり方を説明して家でトレーニングしてもらったのです。これは、1回目です。実は、トレーニングを始めるときにこれ（お菓子）を強化子として使おうと決めているわけですけれども、それが本当に、今、この場でも強化子になるかどうかをチェックする必要があります。そういう、**その場での強化子アセスメント**というものをします。

今、それをやっているところなのですけれども、強化子として何を持って来てもらったかと言いますと、彼が家で普段好んで食べるお菓子です。そのお菓子の袋を開け、袋ごと目の前に差し出し、手を出してくれるかどうかということを確認しているのです。手を出してくれたら、強化子として使えるのですが、手を出してくれない、子どもはそっぽ向いてしまいます。これでは使えません。保護者が持ってこられた強化子はこのお菓子だけだったので、困りました。そこでとりあえず、診察室には必ず置いてあるクーゲルバーンを使ってみました。クーゲルバーンを用意して玉を見せたら、子どもはすぐに手を伸ばしました。玉を強化子として使えます。ラミネートしたカードは持てないですが、プロンプトされてカードを渡し、玉（強化子）をもらいます。それが何回か繰り返されます。

今度はお父さん、お母さんとやってもらいます。トレーニングの間にも人を交代し、人が変わっても絵カードを渡せるようにならなくてはいけません。こういう感じで、1回目は、クーゲルバーンを強化子として使ってできました。

そして、その後は家でトレーニングをしてもらいました。けれども、先ほどご覧になったように、ラミネートしたカードは、この子はうまく持てないのです。そこで、お父さんはペットボトルのキャップを使ってトレーニングしたところ、「これは、グッとつかんで渡せました」ということでした。それで、家でペットボトルのキャップを渡して強化子を要求するということができるようになったのです。

15. フェイズ2：距離をあけて自発的交換を教える

フェイズ1で、自分1人の力でカードを渡せるということが習得できたら、フェイズ2にいくのですけれども、次の動画は、先ほどのお子さんがフェイズ2にいったときの様子です。先ほどの、初めてやったときから2ヵ月後です。診察としては、3回目です。

【Video2】この時、家ではどのようにやっているかやって見せてもらいました。ペットボトルのキャップを渡して、プラスチックのブロックを2つ組み合わせたものを要求する。受け取ったら、彼は2つをまた分解して1つ放り投げて、残りの1つをしばらく眺め、そしてまた、ペットボトルのキャップを渡して、2つくっつけてほしいと要求します。

フェイズ1ができていたので、フェイズ2にいくことにしました。ペットボトルのキャップを、本人から離していくことを始めました。

フェイズ2に初めて入るときに、この子の場合は床の上に座ってやっていますけれども、イスに座ってやることが多いです。イスに座ってやると、席を立てない子が結構いるのです。立ってはいけないと思っている節があり、席を立てなかった。中には、イスごと移動しようとする。とにかく、イスからお尻を離してはいけないと思い込んでいるかのようです。そういう時は身体プロンプトによって、「立ってもいいんだよ」ということを伝えれば、その後はできるようになります。最初はそういうプロンプトが必要な子が多いです。

けれども、この子はそれがいらなかったのです。移動しないとキャップは取れないのですけれども、この子は最初から、自力で移動できました。強化子も同じものを、ずっと使っていたら駄目で、やはり時々変えないといけないのです。そこで、別のおもちゃにしました。この子は、どうも食べ物よりおもちゃの方がいいみたいです。こういうふうに、最初からすぐに移動できる子もいます。トレーニングする人を交代させて、**人の般化をさせる**。強化子も、いろいろな強化子に変えて**強化子の般化**をします。

それから、もう1つの般化、**場所の般化**もします。同じ部屋でだけPECSを使っていたら、そこでしか使えないと思ってしまうかもしれないので、いろいろな場所で使います。そして普段の生活の中で、早くPECSを使えるようにしないといけないのです。それが目標です。

16. フェイズ3：絵カードの区別と自発的な選択

フェイズ2がひと通りできたら、フェイズ3にいきます。**フェイズ3は絵カードの区別と選択**です。最初は2枚のカードから始め、だんだんカードを増やしていきますが、このフェイズがなかなか進まない子がいます。そこで、絵カードの区別がなかなかできない子どもの場合に、いろいろな指導テクニックが開発されています。

それを今日は（全部）紹介する時間がないのですけれども、1つだけ紹介しておきます。（強化子の）絵カードと、もう1枚のカードを白紙のカードにして、絵カードの方に注目しやすくするという方法があります。

【Video3】これは、さきほどのお子さんです。4歳のときに、2月から外来で始めました。それから、6月ぐらいでしたか、彼が通っていた通園施設の、この画面の右手にいる保育士さんが、PECSのワークショップを受けて、この通園施設でもPECSをやってくれるようになりました。それで、この子は毎日PECSを使う機会をもてました。その時の様子です。これは、1枚は白紙のカードで、もう1枚は強化子のお絵描きボードのカードです。ラミネートしたカードは持ちにくいので、カードにレゴブロックを貼り付けて、それをつまんで渡せるように、この保育士さんは工夫されています。

この時の強化子は、このお絵描きボードに保育士さんが絵を描いて、そして、子どもは自分でそれを消すというものでした。この時は、まず彼から見て左側に強化子の絵カード、右側に白紙カードです。次の時には、カードを入れ替えてやります。カードの位置も時々変えて、位置で区別することを覚えないようにする。きちんと絵カードで区別することができるようにしないといけないので、こういうふうに時々カードの位置を変えます。彼は、白紙と強化子のカードに関してはきちんと区別ができていました。

17. フェイズ4：文を作って自発的に要求

何枚か絵カードの区別ができるようになったら**フェイズ4**にいって、**文で要求する**ことを教えます。PECSのコミュニケーション・ブックは、裏表紙の面積が広く、下の方に**図5**のような短冊状の「文カード」をマジックテープで貼り付けてあります。この文カードの上にもマジックテープが貼ってあり、ここにカードを貼れるのです。

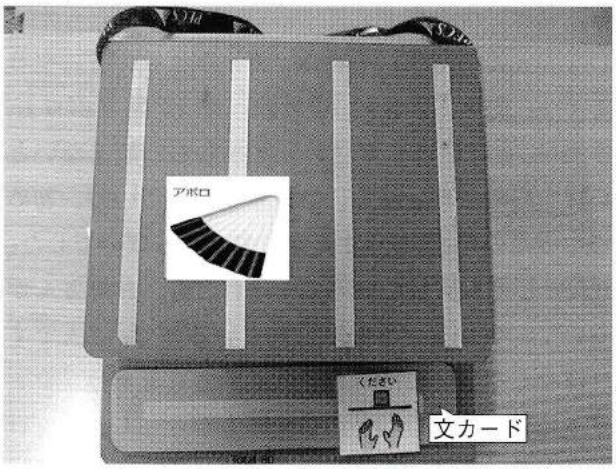

図5　PECSコミュニケーション・ブック

最初は、ください カードを文カードの上に貼っておきます。フェイズ3まで終わっている子どもですから、絵カード1枚で要求することはもうできているわけです。ですから、強化子のカード1枚だけをブックの表紙に貼っておくと、当然、その1枚を渡そうとします。その時に子どもの手を取って、強化子の絵カードを「文カード」に貼らせて、この文カードをはがして手渡すことを、身体プロンプトで教えるのです。

言い忘れましたけれども、フェイズ3からは、1人で教えていいのです。フェイズ1と2だけを2人がかりで教え、フェイズ3からは1人でいいので、当然、このフェイズ4も1人で教えていいわけです。

文カードを受け取ったら、すぐにそれを読み上げ

て、強化子を渡すのです。できるだけ早く強化子を渡さないといけないですから、すぐに読んで渡します。「～ください」とカードを指さしながら読んで、強化子を渡すわけです。それができるようになったら、ください のカードを外してブックの表紙に貼っておき、文カードに強化子 のカードと ください カード2枚を貼って渡すことを教えます。そして、読み上げる時に子どもにカードを指差すことも教えます。その様子を、少しお見せします。

（Video4）初めてフェイズ4を行った、特別支援学校小学部4年生の知的には最重度で、言葉のないお子さんです。表紙に、アポロチョコ のカード、文カードに ください カードが貼ってあります。

この子は、この アポロチョコ を見てアポロチョコのカードを取って渡そうとします。今までそうでしたから、当然そうしようとします。そこで、その手を取って、文カードにアポロチョコのカードを貼らせて、この文カードを渡すことを教えます。受け取ったら、文カードを読まないといけないのですけれども、私は、少し間違えて「はい、アポロ」としか言わなかったのです。それは、カード1枚の時のやり方です。間違えました。受け取って「はい、アポロ」。本当は、「アポロください」ときちんと読まないといけないのです。私も、フェイズ4をこの時、初めてやったので、次どうするかで頭がいっぱいでした。1人でしても構わないのですけれども、お母さんがついて、プロンプトしてくれているので、2人ですればやりやすいです。カードの指差しも身体プロンプトで教えているので、最後の方からどんどんプロンプトをやめていきます。この時、彼はまだ言葉はしゃべれませんでしたが、ここで、完全に文を構成して手渡し、カードの指差しも自力でできるようになりました。ここまででちょうど5分です。この動画は編集していないので、初めてフェイズ4に入って、2枚のカードもきちんと貼って、指差しもきちんと自分でやれるようになるところまでを5分でできるようになったわけです。

フェイズ4をやっているうちに、言葉がなかった子どもも言葉が出たり、言葉が増えたりすることは、全員がそうなるわけではありませんが、よくあることです。

彼も、この時点で言葉はなかったのですけれども、少なくとも、半年以内に言葉が出ました。まず、「ください」が出ました。それから、間もなく2～3ヵ月以内には「アポロください」というふうに、「～ください」と2語文で言えるようになりました。

フェイズ4で言葉が出だした時に、「言葉が出た！」ということで「これからは、もう言葉で！」というふうに、PECSをそこでやめてしまう人がいます。しかし、それは間違いです。そこでやめると、途端に後退します。PECSと言葉で「～ください」と言えていたのに、「～」と単語でしか言えなくなったりします。言葉は、まだ正確に出るとは限らないです。正確なのは絵カードの方です。だから、言葉が出だしても続けないといけないのです。

「言葉でどんどん伝えられるようになったから、もうPECSをやめる」というのは、誰が決めるのか、誰が手段を選ぶのか、最初にお話しした国連の障害者権利条約を思い出してください。コミュニケーション手段を選択する権利は、本人にあるのです。だから、周りの人が、親や支援者が、「もう、PECSはやめなさい」と言うべきものではないのです。言葉のほうがよいと思ったら、本人がだんだんPECSを使わなくなっていくでしょう。しかし、普段はことばでコミュニケーションをとるようになっても、時にはPECSのほうが伝えやすいということもあるみたいで、しまっていたコミュニケーション・ブックをまた引っ張り出して使うということもあるのです。使うか使わないかは、本人に任せるべきです。

18. 属性語を教える

そして、二語文で要求ができるようになったら、今度は文を長くしていくためにいろいろな**属性**を教えていきます。大小や、色や数を指定して、文を長くしていくことを教えていきます。

【Photo】これは、ある子どもが5歳10ヵ月の時に、療育施設で遊んでいる時に、PECSで保育士さんに要求していたときの様子です。彼がPECSを始めてから、ちょうど2年経っていた頃です。言葉では十分には伝えられないのですが、このように6枚のカードを使って、緑 と 青 と 赤 の 車 を 3個 ください と伝えていました。すごいですよね。トレーニングではなくて、遊んでいる場面です。

19. フェイズ5：応答的要求

フェイズ4の次は**フェイズ5**で、**応答の要求**です。これは、簡単です。「何が欲しいの？」と聞いて、答えてもらうのです。ビデオはいきなり、「どれが欲しいの？」と質問して、答えてもらっている場面です。

20. フェイズ6：応答的コメントと自発的コメント

最後のフェイズ6は、なかなか意欲が続きにくい**コメント**です。最初は、**応答のコメント**です。質問して、答えてもらう。実際には、我々の普段の会話でも、コメントが圧倒的に多いでしょう。要求ばかりを会話でしてくる人というのはあまりいないと思います。コメントの方が多いわけです。コメントにはいろいろなものがあります。「何が見える？」、「何が聞こえる？」から始まって、「何を持ってる？」、「今日の天気は、どう？」など。それから、「あなたの誕生日は、いつ？」ということなど、とにかくいろいろあります。

そういったことを、質問し、PECSで答えてもらえるようになったら、今度は自発的なコメントを引き出します。しかし、それ自体をトレーニングできないので、**自発的なコメント**が出やすいような状況設定をします。

日常的な場面でしたら、自発的なコメントは出にくいと思いますので、日常的な場面に、非日常的なことを入れてしまうなど工夫します。突然、いつもの人が何か奇抜な格好をして現れたり、あるいは、箱の中にいろいろなものを入れておいて、「次は、何が出てくるでしょう？」と箱からぱっと出して、「それ、○○」というふうな感じで答えてもらったりします。「なんでしょう。次は、なんでしょう」と応答のコメントを促すのは、自発のコメントにとってプロンプトなので、それを徐々にやめていく。質問というプロンプトを徐々にやめていって、自発的なコメントに繋げていきます。

あるいは、自発的なコメントが出るような少し普段と違う状況を設定します。例えば、いつもは行かない、どこかテーマパークに行ったときに、コメントというのは出やすくなるので、そういう時にきちんとコメントに使えるカードを用意して行くなどです。

【Video5】次の動画は、応答のコメントの場面です。中学3年生で、知的障害が重度の自閉症のお子さんです。お母さんの携帯電話に、彼の好きないろいろな曲をダウンロードしていて、それを再生して、ミュージシャンの名前を答えてもらっています。

コミュニケーション・ブックの表紙に、横長のカードが7枚あります。これはSMAPやCHEMISTRYなど、いろいろなミュージシャンの名前が書いてあるのです。こちらには、2枚のカードがあるのがわかりますか。これは、がとをです。それから、この2枚のカードは、見えると聞こえるの絵カードです。よって、～が聞こえるというふうに3枚のカードを並べて答えてもらう。2試行目に答える時に、カードを渡しながら言葉では何というか、よく聞いていてください。今、「CHEMISTRYが見える」と言ったでしょう。絵カードでは、きちんと聞こえるを選択しているのですが、音声言語の方では間違えているのです。こういうこともあるので、フェイズ4で言葉が出だしたからと言って、すぐにPECSをやめるのはよくないのです。

図6

彼は、中学3年の時に**図6**のような自発的要求とコメントの組み合わせを持ってきたことがあります。てつだってが自発的な要求ですね。びょうきせきさむい。これがコメント、体調に関するコメントです。熱が40℃出ていたということです。

熱があるというカードがなかったのでこのように伝えてきたのです。PECSは補助代替コミュニケーションですから、普段の生活で使えないと意味がないのです。そうするためには、絵カードの数は想像以上にたくさん必要になります。なかなか、絵カードの数が追い付かないのです。普段の生活の中で、家の中ではもちろん、外に出ても使えるようにならないといけません。

【Video6】これは、初めてケンタッキーフライドチキンで、自分で注文してもらったときのものです。

先ほど、絵カードが3枚出ていましたけれど、ケンタッキーの絵カードと、それからチキン2ください のカードです。彼はおじいさんとおばあさんの家に、時々行きます。その時は、必ず近くのケンタッキーに寄って、チキンを2個買って行って、そこで食べるという習慣があります。そこで、彼に

その絵カード3枚を使って、自分で注文してもらおうということになりました。ケンタッキーフライドチキンにお母さんが予め電話して事情を説明したら、当日は店の前で店長が出迎えてくれました。

彼が自分で注文するのは、この時が初めてでしたが、こういうふうにカードをきちんと3枚並べました。そして、それをお母さんに渡そうとしました。お母さんに「チキン、2個買って」と言ったら、お母さんが「そんなん、自分で注文しなさい」と言うようなことが、普通でもよくあるじゃないですか。その後、彼はお母さんの「はいっ！」という言葉と、身振りプロンプトで、きちんとお店の人に文カードを渡し、注文できました。以後、この家族は外食するときには、本人だけではなく、親もPECSで注文するようになったそうです。(笑い)

21. PECSの発展形　iPad PECS

次いで、最近のPECSについてですが、PECSはiPad用のアプリPECS IV+も開発しました。VOCAのような音声が出るものは、他にもスマートフォン用のアプリとしても、いろいろなものが出ていますが、そのようなものを使うときに、PECSでは、

「まず、アナログの通常のPECSをトレーニングして、フェイズ2で**対人接近**がきちんとできて、そしてフェイズ4で**文が作れる**というところまで達成してから、こういうアプリに手を出した方がいい」と勧めています。

それから、そういうアプリに完全移行するのではなく、併用を勧めています。つまり、コミュニケーションの手段が増えるのです。アナログのPECSと、iPad用のPECS、手段が2つ使えるようになるわけです。いつ、どこで、どれを使うかは、本人が選択権をもっているのです。

機器なので、やはり不具合が出る可能性もあります。うっかり充電し忘れて、バッテリーが切れていたなどです。そういう時に、完全移行していると、もうアウトです。だから、両方使えるということが大事です。

そのアプリですけれども、驚かれるかもしれませんが、実は1万円もするのです。そしてiPadとiPad miniでしか使えないのです。しかし、値段は高いけれども、ものすごく高性能です。まず、すでに1,000枚以上のカードが入っているので、とりあえずこの中から使いたい絵カードを選べばいいわけです。ただ、アメリカの製品ですから日本ではあまり使わないカードも入っています。逆に、日本では使うけどアメリカの文化にはないもの、例えばお年玉など、そういうカードがないので、作らないといけないのです。

しかし、新しく絵カードを作るのはすごく簡単です。どんどん、カードを増やしていけるのです。カードの作り方は、以下の3通りあります。

①iPadの中にすでに保存してある画像を使ってカードを作る。
②iPadのカメラ機能を使いその場で写してカードを作る。
③文字入力だけで文字カードを作る。

当初は、インターネットから直接画像を取って作るという4つ目の方法がありました。しかし、それは、Googleが許してくれなくなったそうです。インターネットの画像が使いたければ、まず、いったんiPadに保存して、それをカードにすればいいのです。手続きが1つ増えただけですから、どうということはないと思います。

そしてコミュニケーション・ブックは、iPadのアプリの中に何冊もつくれるのです。アナログのPECSですと、1冊作ってカードが増えると、ものすごく分厚くなります。そうすると、2冊目を作らなくてはいけなくなってくるのですが、アプリでは簡単に作れます。ブック1冊あたり20ページ作れて、1ページあたり24枚のカードを貼り付けられますので、1つのブックに480枚です。それを超えるカードは、2冊目のブックを作って入れればいいのです。あるいは、家庭用、学校用そして外出用などと、使う場面によってブックを分けることもできるのです。

また、このアプリは7ヵ国語に対応しているので、外国語版も作れます。例えば、今度、家族でフランス旅行をするとしたら、フランス語版のブックを作っておき、旅行へ行くと自閉症の子はそれで買い物ができたりします。けれども、フランス語会話のできない親はコミュニケーション障害になってしまいます。環境によって、障害になったりならなかったりするわけです（障害の社会モデル）。

他にもいろいろな機能があります。おそらくそういう点ですごく高性能です。どのように使っているかご紹介したいと思います。先に紹介した重複障害のお子さんで、最初はペットボトルのキャップでフェイズ1と2をやっていた子どもです。3年ほど

前からPECS IV+を使うようになりました。これは診察の時に使っていた様子です。

【Video7】画面下部に文カードがあり、そしてその横をタップすると、音声が出てきます。

彼は、家族で回転寿司屋さんによく行くそうです。今までは、回転寿司屋さんに行ったら、まず親が玉子焼きを取り、本人のお皿に入れ、彼が玉子焼きを食べる。次に行った時も、まず親が玉子焼きを取り、彼のお皿に入れていたそうです。それで、親は錯覚を起こしていたのです。

「この子は、玉子焼きが一番好きだ」と。親が選んでいただけなのです。しかし、いろいろカードを作って、回転寿司屋さん用のページを作ったら、彼はまず何を要求したと思いますか。マグロでした。「では、2つ目は何にする」と聞いたら、またマグロでした。3つ目もマグロだったのです。4つ目で玉子焼きが出て来て、その後も行くたびに、注文が変わる、いろいろなものを注文しているのです。当たり前ですよね。親が、推測していただけですから、本人の意思とは限らないわけです。こういう手段があれば、自分の意思を正しく伝える事ができます。

22. 9つの重要なコミュニケーション・スキル

次に、重要なコミュニケーション・スキルについて話しますが、**図7**の9つが特に重要と言われています。

1. 強化子の要求、これを、フェイズ1から5までですするわけです。次に、**手助けの要求**と**休憩の要求**は別にトレーニングします。**拒否**と**肯定**というものも教えます。理解は、こちら**7.**から先にいくと、これは**活動の切り替え**などです。あるいは、**8.** 絵カードでいろいろな**指示を理解**してもらう、そして、**9.** 絵カードを並べた**スケジュールを理解**するのです。

表出スキル	理解スキル
1．強化子の要求	6．強化子の遅延/消失に応じる（「待って」と「だめ」）
2．手助けの要求	7．活動間の移行
3．休憩の要求	8．指示に従う
4．拒否（いいえ）	9．スケジュールに従う
5．肯定（はい）	

（PECSトレーニング・マニュアルp.243-271）

図7　9つの重要なコミュニケーション・スキル

6つ目に強化子の遅延や消失に応じるとあります。これは、要求した時に「すぐには渡せないので、待ってほしい」ということを伝える。つまり、**「待つ」ということを理解**してもらうスキルです。それから「もう、それは、今日はないから渡せない」という。**「ない」**ということを理解してもらうのです。それが、「強化子の遅延と消失」なのです。それを理解する。これも、非常に大切な理解スキルです。

PECSは、要求やコメントだけを教えるのではありません。このように表出スキルと理解スキルの両方を教えます。

そして、この9つがなぜ重要なのかと言いますと、この9つのスキルを落ち着いて効果的に使えないと、同じ結果を手に入れるために、別の手段を使う可能性が高くなるのです。例えば、自傷や他害行為などです。そういう行動に発展しやすいので、この9つをしっかり教えるということがとても重要になってくるのです。

23. 手助け要求を教える

図8　手助け要求

手助けの要求と休憩の要求ですけれども、手助けの要求というものは、他の絵カードとは少し違う絵カードというか、よく使うのは**図8**のようなプラスチックのプレートです。これをフェイズ3レベルでしたら1枚、フェイズ4で文が使えていたら、2枚3枚4枚……使って[てつだって][ください]、あるいは、さらに長く[～を][てつだって][ください]などと表出します。

どういうふうに教えるかと言いますと、強化子を要求してもらう場面をつくり、強化子を通常のように要求してもらう。だけど、例えば先ほどのアポロチョコの子でしたら、透明な瓶の中にアポロチョコを入れて、固く栓を閉めて「はい、アポロ」と言っ

て、瓶ごと渡します。子どもは、開けようとするけれども開かない。「あれ、開かへん」というふうに子どもが思った時が教えるチャンスです。グズグズしていて、パニックを起こされてからでは駄目です。パニックを起こす前に、困ったなと思った時に、すぐにプロンプターがこのアイコンの[てつだって]と一緒に瓶を戻すということをプロンプトするのです。戻されたら「手伝うよ」と言って、フタを開けて返してあげるのです。強化子を享受するには「自分1人の力ではできない」という場面をつくって、それを教えるのです。

24. 休憩要求を教える

ここでいう**休憩の要求**というものは、拒否とは違いますし、いわゆる休憩時間の休憩というものとも違います。学校の休憩時間のような休憩時間は、どちらかというと余暇の時間、そこで楽しいことができます。ここでいう休憩というのは、少し一服です。少し疲れるような作業や課題などをしていて、少し一服したいという、ほんの2～3分の休憩です。体を休めるだけで、また、前の活動に戻るという休憩なのです。次のような状況で一服したくなります。

・退屈な活動が少し続いている
・難しい活動に取り組んでいる
・要求水準が高い活動をやっている
・強化率が低い

このような時に、休憩エリアを用意して[きゅうけい]アイコンを貼っておくわけです。用意するものは、ソファーやクッションやマットなど少し体を休めるものとタイマーだけです。楽しめるものは置かない。雑誌やDVDなど、そういうものは置かない。それでは、余暇になってしまうからです。

タイマーをセットして、2分程度です。少し一服したいのではないかなと思われるタイミングを見計らい、[きゅうけい]アイコンをもう1人の人に渡すということを、身体プロンプトするわけです。受け取った人は、「休憩していいよ」と言い、休憩エリアに誘導しタイマーを設定する。タイマーが鳴ったらそれを止め、またもとの活動に戻る。その活動が終わったら「こういう強化子があるよ」と見せて、戻りやすくするということです。けれども、これは全て、身体プロンプトなのです。プロンプトは、後の方からどんどん引き上げていくことが大切です。

この休憩要求ができるようになったら、何度も休憩を要求してくるということもあります。そういう子どもには、[きゅうけい]カードをたくさん用意し、一度使ったら元には戻さない、カードはだんだん減っていくというやり方をします。だんだん減っていき、全てなくなったらもう休憩はできないということが（視覚的に）わかるようにするのです。

しかし、自由に要求できるようにしたら30回ぐらい要求してくる人に、いきなり「4回にしよう」と言っても、それは無理です。ですから、30回ぐらいということが観察でわかったら、30枚からスタートです。毎日、1枚ずつ減らしていけばいいのです。

25.「待つ」を教える

「待って」に応じる(2)

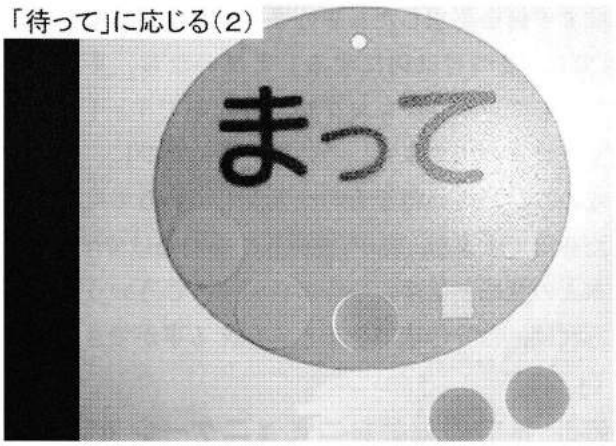

図9　待つための視覚的手がかり

強化子の遅延に関しては、[まつ]というプレートを渡して待っていてもらうのです。これも、最初は強化子を要求してきたらこのプレートを渡して「ちょっと待って」と言って、1秒ぐらいで、すぐ「よく待ったね」と言って回収して強化子を渡す。そして、少しずつ待っていてもらう時間を延ばしていくのです。

このトレーニングでは、待ってもらうのは30秒程度までなのですけれども、もっと長い時間待ってもらうには、**図9**のようなチップを貼っていくようにします。全て貼り終わったときに「よく待ったね」と言って回収する、あるいは、タイマーを貼り付けてタイマーが鳴るまでということにします。

26. ない（NO）の伝え方

「ない」に関して（**図10**）。これは回数制限の方法もありますし、代わりのもので我慢してもらうこともあります。今すぐは駄目だけれどしばらく待ってもらうということもありますし、課題をやったら要求に応じるというトークン・システムや視覚的強化システムという方法もあります。それから、スケ

ジュールで伝える場合もあります。「今は駄目だけれども、このスケジュールのこの時間にはそれを要求してもいいから」と言って、スケジュールのその時間にカードを貼っておくなどの方法です。

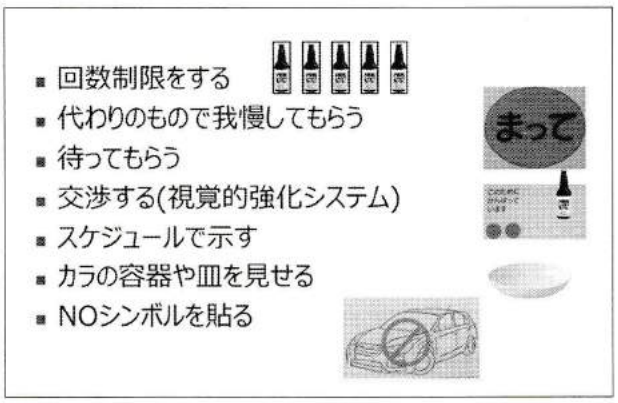

図 10　ない（NO）の伝え方

それから、「ない」ということは見えないけれど、容器やお皿や袋などが空だということを見せることができます。あるいは、手を広げて「ない」ということを視覚的に伝えながら、カードに NO シンボルを貼るのです。これが貼ってあるカードを渡してきても「ありません」と言いながら、ひたすら「ない」ことを視覚的に伝えます。

これはすぐに理解してくれます。ラミネートしたカードに、何度も貼ったりはがしたりできる NO シールも売っています。油性のマーカーで NO シンボルを描いてもいいのです。これは消しゴムで消せます。ないからと言って、カードを隠しておくことは絶対に駄目です。視覚的な記憶力のいい子が多いですから、「あった」ということは絶対覚えていて、必死で探すでしょう。そしてなかったら、子どもによっては大パニックになります。だから、きちんと「ない」ということを理解できるようにしないといけません。

他の理解スキルについては、省略します。

27. PECS のすぐれた点

PECS の優れた点は、まず**自発的なコミュニケーションを最初から教えられる**ことです（**図 11**）。プロンプトをできるだけ早くやめていくので**プロンプト依存にはなりません**。カードを**手渡すので、相手を意識します。対人接近が確実にできるようになります**。プロンプターが付いているにせよ、必ず毎回コミュニケーションが成立するわけです。要求が伝わります。だから、**信頼関係が築きやすい**のです。

- 最初から自発的コミュニケーションを教える。
- 自発を目指し，プロンプトは早くフェイドするので，プロンプト依存(指示待ち)にならない。
- 手渡すので相手を意識するようになる。
- 対人接近が確実にできるようになる。
- コミュニケーションが成立することで信頼関係を築きやすい。

図 11　PECS の優れた点

基礎篇のワークショップは丸 2 日間で、レベル 1 のワークショップと呼んでいます。PECS を実行するには、ワークショップに出てからの方が望ましいです。

ワークショップの日程と開催地については、ピラミッド教育コンサルタントオブジャパンのホームページをご覧ください。(http://pecs-japan.com/)

PECS に関して、日本語で読める適当な本はないのです。そこで、PECS に関する資料を、いくつか私のホームページに上げていますのでご覧ください(https://kado2006.sakura.ne.jp/)。

自閉症の人に、補助代替コミュニケーションを使わせないということは、虐待や差別行為にあたります。本人がコミュニケーション手段を、選べるようにしないといけないのです。ちょうど時間となりましたので終わりにしたいと思います。